

（BOX 3）最近のコスト圧力の高まり

消費者物価（除く生鮮食品・エネルギー）は弱めの動きが続いているものの、コスト面からみた物価上昇圧力を計測する「コストプッシュ指標」をみると、足もとでは物価上昇圧力が高まりつつある。

コストプッシュ指標とは、「まだ価格転嫁できていないコスト圧力」を定量的に捉えようとしたものである。過去の平均的な関係からして、企業が投入コストに見合う水準に販売価格を設定していれば、コストプッシュ指標はゼロとなる一方で、コストを価格に十分転嫁できていない場合にはプラスとなるように計算している。

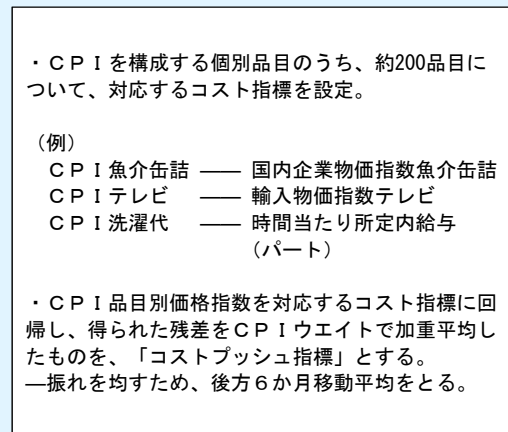
コストプッシュ指標の算出に当たっては、まず、消費者物価の個別品目ごとに、最も重要とみられる投入コスト指標（企業物価、輸入物価、賃金など）を選択する。そのうえで、品目ごとに、消費者物価をコスト指標に回帰して得られた残差を、消費者物価指数のウエイトで加重平均する³⁵（図表 B3-1）。

こうして作成したコストプッシュ指標の動きをみると、2015 年初に高い水準をつけたあと、低下傾向をたどってきたが、2017 年入り後には、衣料品を除き、価格上昇圧力が高まっていることがわかる（図表 B3-2）。

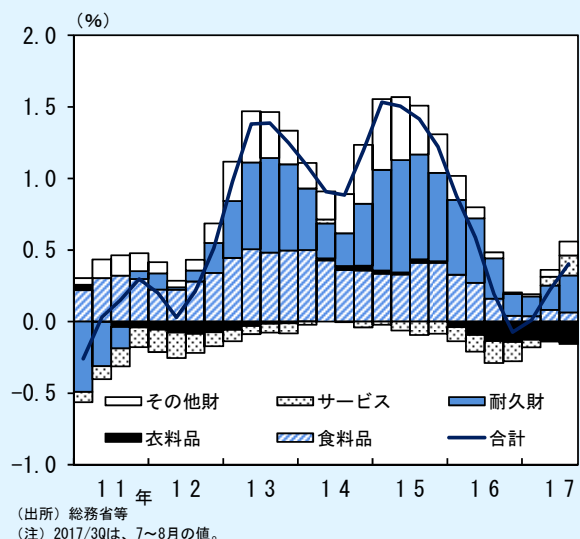
コストプッシュ指標は、約 520 品目で構成される消費者物価（除く生鮮食品・エネルギー）のう

³⁵ 品目によっては、単一の投入コスト指標でコスト全体の動きを捉えることが難しい。こうした指標作成上の問題への簡便な対応として、一部の品目では線形トレンドをコントロールしたうえで、残差を求めている。また、長期の時系列データが確保できなかったり、回帰した結果、パラメータの符号条件が満たされなかったりした品目は、加重平均の際に除外している。

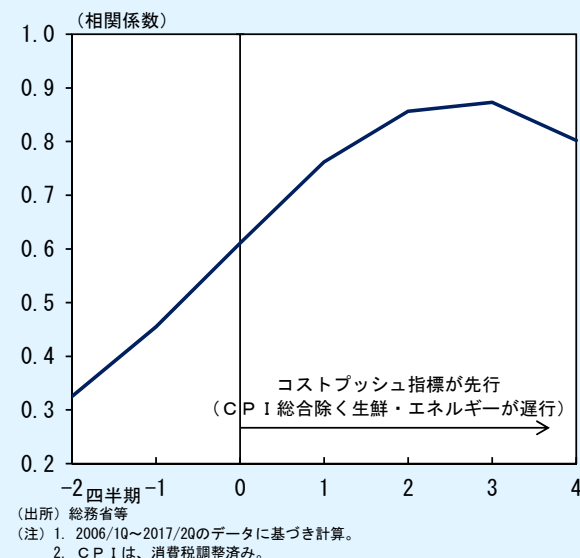
図表B3-1：コストプッシュ指標の概要



図表B3-2：コストプッシュ指標の推移



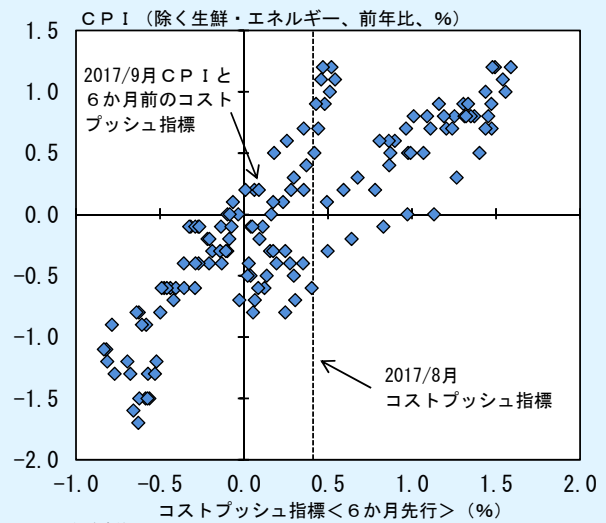
図表B3-3：CPIとの時差相関



ち、200 品目ほどしかカバーしていないものの、両者の間には高い相関があり、コストプッシュ指標が2～3 四半期程度先行する（図表 B3-3）。この点は、コストプッシュ指標（6 か月先行）と消費者物価（除く生鮮食品・エネルギー）の前年比を散布図で示すと、両者に正の相関がみられることから確認できる（図表 B3-4）。

こうしたアプローチは、需給ギャップと消費者物価の関係を捉えた「フィリップス曲線」の考え方を補完するものである。需給ギャップが着実に改善するもとの、コストプッシュ指標が高まると、企業の価格設定スタンスも次第に積極化するものと考えられる。

図表B3-4：コストプッシュ指標とCPI



（出所）総務省等
 （注）1. サンプル期間は、2006/1～2017/9月。
 2. CPIは、消費税調整済み。